

少人数で最多症例数を執刀し 肺がん手術日本一を守り抜く呼吸器外科医

わた なべ しゅん い ち
渡辺 俊一

国立がん研究センター中央病院 呼吸器外科長



第一線で患者を診続けたい

患者最優先の温かいまなざし

朝8時、まだ外来が始まる前の時間。

国立がん研究センター中央病院の診察室

には、電話で患者と話す医師の姿があつた。

「調子が悪くなつたらいつでも電話を

かけてきてくださいと伝えています」

呼吸器外科長、渡辺俊一氏の下には

退院していく患者から、ちょっととした

不安を訴える電話が毎日のようにかかる

てくる。手術を終えた患者の体調変化

時に、直接主治医と電話で話せるシステム

は、渡辺氏が呼吸器外科長になつてから

開始されたものだ。

一番つながりやすいのが、朝の8時か

ら9時の間だと退院前に伝えていると

いう。他院から研修に来ている医師は

「そこまでするのが……と驚きの声を

上げる。慌ただしい時間に、なぜ自ら電

話に出るのだろう。

「連絡が来るのは患者さんがつらい時

です。対応が遅れれば重症化してしま

うこと。

術後はちょっとしたことでも不安になるもの。その気持ちに真摯に応えた

のです」

患者に寄り添う姿勢に、地域の病院や

開業医からは絶大な信頼が寄せられる。

その結果は年間の手術件数に確実に現

れている。国がん中央病院の呼吸器外

科は、肺がんの手術件数が国内トップで、

そのポジションを20年以上も守り続け

ているのだ。

渡辺氏にはこれまで何度も大学教授

の誘いがあつたが、全て断つていい。

第一線で患者を診続けたいからだ。2002

年に同院に赴任して以来、60000人以上

の手術を行ってきた。

「自分がメスを入れた患者さんのこと

は、責任を持つて最後まで診たい。その

患者さんたちを置いていけません」

そう語る中には、患者を最優先に考

る温かく強い意志がある。渡辺氏の医

師像が形作られたのは、生まれ育った環

境によるところが大きい。これまでど

うことです。

んな人生を歩んできたのか、金沢の地か

らそのルーツをたどつていこう。

父方は大学教授、母方は町医者

サラブレッドとして育つ

幼少期から、石川県金沢市の中心地

が遊び場だった。実家は、日本三大庭

園の一つである兼六園から歩いて行け

るところにある。通っていた小・中学校

があつた場所には金沢21世紀美術館が

建つていて。

渡辺氏にとって、医療は家族とのつな

がりそのものだ。父は金沢大学の外科

の教授で、同居していた祖父も同じ大学

の病理学教授だった。一方、母方は代々

町医者の家系で、祖父は金沢の外れで開

業していた。

「いわゆる“赤ひげ”先生のような診療

をしていました」

家の玄関先には、いつも古びた1台

のスクーターが止まっていた。それに考

える渡辺氏の基盤を作つたことは

間違いない。

Text 安藤梢

Photograph 緒方一貴

父の背中を追うように金沢大学の医

学部に進学すると、大学から徒歩数分の距離にあつた実家は、友人たちのたまり場になつた。

夜中まで友人たちと映画やアメリカの音楽番組を見ながら、大騒ぎをする毎日。

「両親は最初うるさくて眠れなかつたそうですが、そのうちうるさくても眠れるようになつたと(笑)。温かく見守つてもらえたのは、ありがたかったです」

冷静な語り口の中にも、どこか大らか

さを感じさせる渡辺氏。その性質は、優しい両親の下で育まれ受け継いだものなのだろう。

機能温存で予後が変わる力量が試される肺がん手術

外科医を目指したのは、呼吸器外科医だつた父の影響だ。自分のメスで患者を治せるこつにも魅力を感じた。大学時代の友人たちからは「ショートスリー

パーのお前は、外科医になるしかない」と言っていた。朝まで飲み明かしても、3時間も眠れば回復し、平気な顔で授業に出でたからだ。

金沢大学の外科に入局し、肺がん手術の助手に入るようになると、その面白さに引き込まれていつた。

今でも記憶に残つてゐる手術がある。40代の男性患者で、肺門部に大きながんの動き、針のさばき方を何度も観察し、記憶を頼りに真似ていつた。

Goldstraw氏から繰り返し言われたのは、手術の適応を決めるのは年齢や數値ではなくphysical status(体の状態)だということ。患者の状態をしつかり診て判断する。師の教えは、それ以来、渡辺氏が肺がん手術の適応を決める際の指針になつてゐる。

後に国がん中央病院に赴任してから、肺機能が著しく低下した男性の肺がん患者を診た。大学病院では手術を断られていた。呼吸機能検査の数値だけを見ると、ガイドラインでは手術が難しい

のに速くて正確でした」

無駄な動きがない縫合は、華麗でアートのようだつた。そのスキルを身に付けていた一心で、自ら持針器と鑑子を買い、できるまで毎日練習を繰り返した。手術中にどのように持針器を持つのか、手

の動き、針のさばき方を何度も観察し、記憶を頼りに真似ていつた。

もつと手術の腕を磨きたい

37歳で単身上京を決意

「このままでは留学して学んだことが役立てられない……」

2年間の留学を経て、イギリスから帰国すると、金沢大学から北陸の病院への赴任を命じられた。地方の中規模病院では、肺がんの難症例を手術する機会はほとんどない。渡辺氏は悶々としていた。転機となつたのは、国立がんセンター中央病院(当時)で受けた2週間の短期研修だつた。北陸以外の病院を知らなかつたので、「一度東京に行つてみるか」という軽い気持ちだつた。

そこで大きな衝撃を受けた。どの診療科の外科医にも新しい治療法を開発しようとする意気込みがあり、病院全体



が見つかつた。彼は元サッカー選手で、現役を引退した後も審判員の資格を取つて活動するなど、サッカーが生きがいだつた。

右肺を全摘しなければ、がんを取り切れないので、復帰するのは難しい。執刀医だつた上司が選択したのは気管支形成術だつた。がんを取り除いた後に、残つた肺の気管支と血管同士をつなぎ合わせ、肺の機能を温存する。

難易度は高かつたが、手術は無事に成功。患者は再びフィールドに立つことができた。

「術後の患者さんの生活や仕事のことまで考えながら、しっかりとんを取つて治す。それには医師の技術力が必要で、これはやりがいがある仕事だなと」

肺がんの手術では、画像所見や患者の社会的背景などさまざまな要素を頭に入れながら、肺を切除する量やリンパ節郭清の範囲などを、術中でも瞬時に判断しなければならない。技術を磨けば、患者の状態が悪くとも、QOLを保つたままがんを治せる可能性がある。

技術の習得に、医師人生をかけよう。渡辺氏の心は固まつた。卒後10年で、北陸にある関連病院を10カ所も転々としながら、外科医としての基礎を身に付けていった。

渡辺氏の粘り強い性格を表すエピソード

手術の適応を決めるのは “physical status”

34歳の時に臨床留学でロンドンのRoyal Brompton病院へ。そこで師事したのが、呼吸器外科の名医Goldstraw氏だつた。氏が得意としていたのは、肺がんの気管支形成術。その手技を、何度も間近で見ることができたのは大きな学びであった。

「Goldstraw先生は手術が上手で、気管支、血管、肺を全て手縫いで縫合していました。日本では自動縫合器でそれらの縫合や切離をしますが、彼は手縫いな

が熱いエネルギーに満ちあつれていたのだ。地方から私財を投げ売つて卓越した技術を学びたいと來ていた研修医も大勢いた。渡辺氏は自分もここで頑張つてみたい、と思つた。

「スタッフに欠員が出たらぜひ選考のチヤンスをください、と半ば強引に履歴書を送りました」

連絡が来たときは、履歴書を送つてから1年が経つていて、面接試験を受けに行くと、当時の院長から「手術が下手だつたら、研修医は誰も見に来ません。ここはそのくらい厳しい世界ですよ」と言われた。

「後を継がないといけなかつたのでしょ」と思つたが、結果は採用――。父に告げると「競争の激しい東京でもまれてこい」と激励し、寂しがる母に「子どもが親元にいるだけが親孝行じゃない。俊一が立派になるのを見守ろう」と言つてくれた。退路を断つたために金沢大学の医局からも離れた。地元の大学教授の息子で、地域医療に尽力した“赤ひげ”的孫。周囲は当然のようになつた。

「後を継がないといけなかつたのでしょ」と思つたが、結果は採用――。父に告げると「競争の激しい東京でもまれてこい」と激励し、寂しがる母に「子どもが親元にいるだけが親孝行じゃない。俊一が立派になるのを見守ろう」と言つてくれた。退路を断つたために金沢大学の医局からも離れた。地元の大学教授の息子で、地域医療に尽力した“赤ひげ”的孫。周囲は当然のようになつた。

呼吸器外科としてさらに技術を磨きたい。強い思いと大きな期待を抱いて渡辺氏が上京したのは、37歳の時だつた。

ドがある。北陸の病院に赴任していた頃、スキーに真剣に取り組んだ。車に用

具一式を積んでおき、土日の午前中の回診後1時間かけて一人でスキー場に向かう。

「とにかくバッジテスト1級を取ろうと思つて、何度も試験に挑戦しました」

スキー検定1級の合格率はわずか8%。超難関である。週末だけの限られた時間で、ひたむきに練習を続け、数年かけて合格を勝ち取つた。

「国試に受かつたときよりもうれしかつた(笑)」

負けず嫌いで、一度自分で決めたことは諦めずにやり切る。そのストイックさは、外科医として技術を極めていく過程でも大いに發揮されていく。

「国試に受かつたときよりもうれしかつた(笑)」

負けず嫌いで、一度自分で決めたことは諦めずにやり切る。そのストイックさは、外科医として技術を極めていく過程でも大いに發揮されていく。

写真で見る

軌跡

Doctors
HISTORY
Shunichi Watanabe



中学校入学の日、
自宅前にて



小学生の頃、父母妹と
5歳の頃、3歳の妹と
七五三



金沢大学外科医局のスキー旅行にて

医学部5年の頃、
実習グループの仲間と小旅行

医学生時代、テニスの仲間と

